

などの軟部組織が多く13例、その他乳腺に3例、肝臓が1例であった。腫瘍の大きさは小指頭大から鷲卵大のものまでみられた。

組織学的には軟部組織に Fibroma 2例, Fibrosarcoma 4例, Rhabdomyosarcoma 4例, Hemangioma 3例, 雌の乳腺に Adenocarcinoma 3例 肝に Hepatoma 1例がみられた。また腫瘍が多発している例が2例認められ、1例は Fibrosarcoma で他は良性の腫瘍で Fibroma と Fibroadenoma の例であった。17例の腫瘍のうち Adenocarcinoma 3例と Fibroma 2例にヘマトキシリンに濃染する巨大な細胞が著明に出現していて、細胞質は顆粒状で脱顆粒がみられた。この細胞はトリジンブルー染色でメタクロマジーを起し、ウオーターブルー、オルセイン染色で赤く染色され mast cell と同定された。

今回は末梢血による白血病の検索を行っていないが肝・脾臓などの各臓器の検索、腫瘍における mast cell の動態又顎骨の反応などについては今後検索する予定である。

質 問：大屋 高德（第一口腔外科）

1) NBUによる顎骨部に腫瘍を発現した症例はありましたか。

2) NBU投与中止後も、腫瘍は発育したか。

質 問：伊藤 忠信（歯科薬理）

乳腺由来のものと考えられた理由。

回 答：演 者

1. (大屋先生に) 福西らの報告ではNBUでラットの顎骨内に少数ながらも歯性腫瘍が認められるという報告があります。
2. (伊藤先生に) 文献的にも雌に乳癌ができるという報告がある。又 Adenocarcinoma が腹部の皮下に発生している事、乳腺の他に組織由来が考えられない(ラットの皮膚手足の裏以外には汗腺がないので)ので乳腺由来のものと考えてよいと思う。

回 答：佐藤 方信（口腔病理）

1. 腹部皮下にみられた腫瘍は肉眼的、組織学所見から乳腺由来の腫瘍と考える。
2. 臨床的に人乳癌においては腺癌のみならず種々の組織像のものがみられる。

演題6 上顎癌に対する三者併用療法の検討 特に再発処置について

○大屋 高德, 石橋 薫, 山口 一成
千葉 清, 近江 啓一, 工藤 啓吾

藤岡 幸雄, 村井 竹雄*, 鈴木 鍾美**

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座*

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座**

昭和51年から53年までの過去3年間における当科の上顎癌症例は15例であった。これら全例に照射(60Co 800~3400R)と制癌剤(5-FU.625~3,700mg)の量を極力減少させ、その1~3日後に徹底的な局所清掃を実施したところ、良好な一次治療成績が得られているのみでなく、顎顔面の形態と機能をも保存し得る症例が多くなっている。しかし、15例中7例(46.6%)に再発がみられたので、再度局所清掃を主体とした再発処置を実施し、以後いずれも良好に経過している。

即ち、一次症例は上顎洞癌(T₃)が11例、歯肉癌が(T₄)3例で、また二次症例は歯肉癌が1例であった。15例の組織型は扁平上皮癌が12例、腺癌が2例、円柱上皮癌が1例であった。つぎに7例の再発までの期間は術後3カ月目が3例、4カ月目、5カ月目、6カ月目および3年目が各1例であった。

再発7例の治療内訳は、3例の扁平上皮癌にはBleomycin 1回5mgを計30mg~50mgの静注と、60Co 1回200Rを1,200~1,400Rの同時併用後に局所清掃を行ったが、1例の円柱上皮癌では1,200Rの照射後に局所清掃を行った。また3例には外来で経過観察中に生検をかねた局所清掃のみを行った。なお、1例には再々局所清掃を行った。以後6カ月以上を経過しているが、いずれも局所の腫瘍は制御され良好である。

座長 上野 和之

演題7 生活歯根の骨内埋伏法を用いたオーバーデンチャー

義歯装着後における支台歯の病理学的考察

○塩月 牧子, 小林 琢三, 清野 和夫
山田 芳夫, 高橋 孝一, 田中 久敏
鈴木 鍾美*, 竹下 信義*, 大屋 高德**

岩手医科大学歯学部補綴学第一・第二講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座**